Japanese Association for Religious Studies

狩猟民の神話と世界観
――〈動物の主〉再考――

山田仁史

一九世紀末以来、生業形態と結びつく世界観の諸段階について、主に宗教民族学の分野において研究が進められてきた。大まかに言えば、狩猟採集民においては人と動物の関係が密接で、〈動物の主〉など動物についての神話・世界観が発達し、牧畜民ではしばしば、天に唯一の父なる神という観念が卓越してこれが一神教の源泉となった。初期農耕民のもとでは流血儀礼が盛行し、これはハイヌヴェレ型（死体化生型）作物起源神話と結びつけられることもあって、その場合、穀物農耕民のプロメテウス型（盗み型）作物起源神話と対置される。そして高文化（文明）世界では、神々の三機能や、大宇宙・小宇宙の対応といった壮大な宇宙論が展開する。近年における創世神話の通文化研究でも、こうした生業形態を分類枠組として利用している。

しかし一口に狩猟採集民、ないし狩猟民とは言っても、その暮らす生態環境と、それに応じた活動のありかたは様々である。トゥルンヴァルトは次の四つに分類した。(一)氷の狩猟採集民：極北エスキモー、カナダのコパー・エスキモー、北シベリア諸族など、(二)ステップ・沙漠・草原の狩猟採集民：南西アフリカのベルクダマ、南アフリカのブッシュマン、オーストラリア人、カリフォルニア・インディアン、グレートソルト湖の採集民インディアンなど、(三)森の狩猟採集民：アンダマン諸島民、セイロン島のヴェッダ、マレー半島のネグリート、スマトラ島のクブ、中央アフリカ諸族など、(四)水の狩猟採集民：東シベリアの海岸チュクチ、コンゴのロケレ漁民・商人など。

狩猟民の世界観としては、骨からの再生、復讐への恐怖といった要素に加え、英語圏ではしばしば無理解も見られるとは言え、〈動物の主〉観念が一般に注目されてきた。ドイツ語でHerr/Herrin der Tiere、英語でMaster/Lord/Lady of Animalsなどと称されるもので、訳語としては「野獣の主」などが当てられてきたが、ここでは、魚なども加えるべきとの考えから、〈動物の主（ぬし）〉を採用している。

この〈動物の主〉観念およびこれにかかわる神話・伝承をめぐっての今後への展望として、いくつかの点を指摘したい。

第一に、地域ごと、あるいは生態環境による差異への注目が必要なことである。たとえばバウマンの研究したアフリカの〈動物の主〉を見ると、ブッシュマン（サン）では虫やカメレオンが、ホッテントット（コイ）ではエランドなどが、ピグミーでは象などがこれに相当するとされ、時にいたずら者として、時に高神ないし創造神として現れる。〈動物の主〉とトリックスターとの境界が曖昧なことにも留意すべきだ。

しかし二点目として、そうした差異を踏まえた上で、とりわけ生態環境の似通った地域間における比較を推進すべきであろう。これまでにも指摘されてきたように、アイヌの鹿の神

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

(yuk kor kamuy) や魚の神 (cep kor kamuy)、日本の山の神や山姥などは、本格的な比較研究を待っている。北日本の日本海側に広く見られる鮭のオースケ・コースケの伝承なども、この関連で採り上げられるべきである。

最後に第三点として、〈動物の主〉を神観念の一つの祖型と見るべきだという主張に賛意を表しつつも、これがかつてシュミットの原始一神教説への批判という側面も持ったことを忘れてはなるまい。いずれにせよドグマ化を避け、具体的事例に即して〈動物の主〉の諸相をとらえてゆきたい。

古代北欧社会における血の復讐

——主としてサガを通して——

中里　巧

古代北欧社会における血の復讐は、いわば聖なる義務であった。本発表で掲げる古代とは、アイスランド古法『グラウガス』や一群のアイスランドサガの時代を指す。すなわち、およそ紀元後八〇〇年代から一三〇〇年代までの時代のことである。また北欧とは、主としてスカンジナヴィア地域言い換えれば古ノルド語から派生したスカンジナヴィア諸語を母国語とするアイスランド・デンマーク・ノルウェー・スウェーデン地域のことである。したがって、フィン—ウルタイ言語を母国語とするフィンランド地域は含まれない。

古代北欧社会における血の復讐という伝統、すなわち、血の復讐を例外のない義務とする習俗は、古ノルド語の世界観や価値観に連なる有意味性体系の母胎と云うべき北方ゲルマン民族固有の習俗であった。言い換えれば、古代北欧地域において北方ゲルマン民族以外にサーミやイヌイットといった民族もまた見いだされるのであるが、サーミやイヌイットの説話や宗教習俗の中に血の復讐に類する事例が個別には実在する可能性がまったくないとは云えないにしても、少なくとも、北方ゲルマン民族が有していたほどきわだった慣習としてサーミやイヌイットが、血の復讐という理解を有していたことはなかった。

北方ゲルマン民族とサーミおよびイヌイットとの民族特性の相異も、興味深い論点である。なお本発表では射程が広大になり過ぎるため、述べるべきではないかもしれないが、アイヌはサーミおよびイヌイットと熊祭り儀礼やシャーマン儀礼といった宗教習俗において類縁関係にあり、宗教習俗を以てして社会制度の基層と考えるなら、北方ゲルマン民族とアイヌとの民族特性の相異についても議論可能である。サーミ・イヌイット・アイヌの宗教習俗や価値観がアニミズムを本質としており、彼らの世界観にはアニミズムに対する著しい葛藤や矛盾が本来見られない。これに対して、北方ゲルマン民族においてはアニミズムに対する著しい葛藤や矛盾が垣間見られる。『古エッダ』や『スノリのエッダ』に散見される絶滅神話は、神々と巨人ないしは人間と自然との底知れぬ葛藤と矛盾の産物である。こうしたアニミズムないし自然との葛藤や矛盾という古代北方ゲルマン社会の根底に響いて止まない重奏低音のひとつのシンボル

NII-Electronic Library Service